

マレーシア映画文化研究会 —2012年度の活動について—

篠崎 香織

イスラム教の預言者ムハンマドにかかわる映像作品がイスラム圏各地でアメリカに対する抗議活動のきっかけとなった事件は記憶に新しい。誰もが映像作品を作り世界に発信できる今日、映像作品と社会との関係はますます密接化し複雑化している。こうした今日の状況を引き続き意識しながら、JAMS 連携研究会であるマレーシア映画文化研究会は今年度の活動を以下のように予定している。

第3回ヤスミン・アフマド追悼 京都マレーシア映画文化シンポジウム「栄光は誰れのために——マレーシアの経済発展の裏にある教育」(7月30日、芝蘭会館山内ホール)¹

マレーシア映画文化研究会では、2009年7月に急逝したヤスミン・アフマド監督を追悼するシンポジウムを毎年行っている。このシンポジウムでは、多民族・多宗教が共生を模索するマレーシア社会の光と影を鋭く見据えつつ、希望を見いだそうとしてきたヤスミン監督の作品が残したものはいくつか、またそれは現在どのように受け継がれているのかを考えることを趣旨としている。

ヤスミン監督がこの世を去って3年目となる今年度は、『グブラ』のビラル(礼拝所の管理人)役を

務めたナムロン(Nam Ron)²が脚本・監督を手がけた2本の作品を題材に、目覚ましい経済成長を遂げてきた多民族社会マレーシアの光と陰を考えた。プログラムは以下の通り。

第一部 ヤスミン・アフマド監督作品上映

参考上映 『グブラ』(Gubra, 2006年)

第二部 シンポジウム

発表1 篠崎香織「マレーシアの新経済政策と民族問題」

発表2 山本博之「マレーシアの高校生活と規律」

参考上映 『喧嘩』、『父さん、なぜバナナの木を伐らないの』

パネルディスカッション

今回上映した3本の作品から共通して読み取れるのは、マレーシアの経済発展とマレー人社会における格差の拡大である。

『グブラ』は、同じ街に住む2組の若いマレー人夫婦とそれを取り巻く家族・近隣者を描いた作品である。異なる階層に属する2組の夫婦は、交わることなく並行して描かれる。一方は、イギリス留学から帰国してキャリアを積む女性と広告代理

² 本名は Shahili bin Abdan。1969年、プルリス州カンガール生まれ。国立芸術学院(ASWARA)出身で、演劇を中心に活動。主な映画主演作に『夏のない年』(Year without Summer、タン・チュイムイ監督、2010年)がある。2008年に「演劇人の家」(Rumah Anak Teater)を設立。Nam Ronは、タイ語で「お湯」の意味。タイとの国境に近い街の出身でタイ語が少し分かるナムロンが、先輩にタイ語を話してみると言われて口にしたのがこの語で、それが芸名となった。

¹主催:マレーシア映画文化研究会・京都大学地域研究統合情報センター、共催:京都大学地域研究統合情報センター共同研究『『混成アジア映画』に見る世界:一潮流としてのマレーシアを中心に』、日本マレーシア学会。

店に務める男性の夫婦で、裕福な層に属する。もう一方は、ナムロン演じる礼拝所の管理人をする聖職者とその妻と息子の家族で、慎ましく暮らしている。隣家には、やむを得ない事情により売春で生計をたてる女性たちとその息子が住む。日常を覆す事件がそれぞれに起こり、それぞれの「グブラ(動揺)」が描かれる中で、物質的な豊かさや人間の幸福というテーマが様々な側面から問われる。

『喧嘩』(Gaduh、ナムロン監督、2008年)は中等学校を舞台にした作品である。この学校では、日頃からマレー人生徒のグループと華人生徒のグループが対立している。協働を通じた相互理解を図るため、彼らは、ナムロン演じる劇作家／俳優を顧問に迎えた新設の演劇部に強制的に参加させられる。劇中劇では、常に腹の中に抱えてはいるが直接個人に向けて発せられることは決してない他民族に対する不満や悪口がストレートに吐き出される。生徒たちは、感情をさらけ出し、様々な事件を経験するなかで、相手へのいらだちは実は自分自身へのいらだちであることに気づく。それは、経済発展に取り残されまいともがく親のいらだちのしわ寄せでもあった。

『父さん、なぜバナナの木を伐らないの』(Ayah Kenapa Tebang Pokok Pisang、ナムロン監督、2008年)は、都市開発が進むクアラランプールを舞台とした短編映画である。マレーシアでマレー人は土地の主人であることを根拠に、特権的な地位を確保してきた。これに対してこの作品では、建設現場の事故で障害を負い、残されたわずかな土地にバナナを植えて生計を立てるマレー人男性とその妻と息子が、都市開発で成り上がろうとするマレー人に土地を収奪され、困窮に喘ぐ姿が描かれる。

ヤスミン監督は、様々な批判を受けながらも、マレーシアの主流派が正面からとらえることがほとんどないマレーシア社会の課題を、映像を通じて多くの人に問うてきた。ナムロンは今、マレー語の主要メディアが正面からとらえることがほとんどないマレー人社会の課題を、映像を通じて多くの人に問うている。

シンポジウム『『外中華』映画の世界——ツァイ・ミンリャンとエドウィンに見る世代の絆』

今年の東京国際映画祭では、ガリン・ヌグロホ、リリ・リザ、エドウィン各監督の作品を集めた「インドネシア・エクスプレス」³部門が開催される。これにちなみ、インドネシアのスラバヤ出身の中華系インドネシア人であるエドウィン監督の作品⁴と、マレーシアのクチン出身で台湾を拠点に活躍するツァイ・ミンリャン監督の作品を取りあげたシンポジウムを開催した。開催にあたっては、東京国際映画祭の協力を得てエドウィン監督をゲスト・スピーカーとして招き、充実した議論を行うことができた。詳細は次号以降で紹介したい。

公開研究会

2013年2月頃に、マレーシア映画に関する情報を交換する公開研究会を開催し、それをもとに来年度のシンポジウムを企画する。詳細については後日、JAMS 会員メールリストを通じて告知する。

³ このほかにアジアの風・中東パノラマ部門でもリリ・リザ監督作品が上映され、映画祭全体としてはインドネシア映画が7本上映された。

⁴ 東京国際映画祭では「空を飛びたい盲目のブタ」(2008年)と「動物園からのポストカード」(2012年)が上映された。